



枘内曾次郎研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 比呂己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008625

栃内曾次郎研究

北海道教育大学釧路校准教授

佐野 比呂己

一 はじめに

本稿は、明治期から昭和前期にかけての日本海軍軍人であり、海軍大将、貴族院議員までつとめた栃内曾次郎について、その年譜を作成し、その人となりを考察しようとするものである。

稿者は、以前、曾次郎の子である吉彦の随筆について教材として分析・考察を加えたことがある¹⁾。その中で、稿者は、吉彦について、次のように記している。

栃内が札幌を遊学の地に選択した理由は、栃内の父の宮部金吾²⁾への敬慕が一つの機縁であったという。栃内の父曾次郎が幼小のころ、札幌農学校の学生であった新渡戸稲造を同郷の先輩として、しばしば学校の寮を訪ねた。その際、たまたま同室であった宮部の人となりに傾倒し、植物学を志すならその指導をと父からすすめられたからだという³⁾。

曾次郎は、やがて植物学者となる吉彦に大きな影響を与えた人物であることはいままでもない。

曾次郎についての研究は非常に少なく、曾次郎の伝記をまとめたものは野村実⁴⁾氏、及び『日本人名大辞典』(上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修 講談社 平成十三年(二〇〇一)十二月)が見られる程度である。

『日本人名大辞典』の「栃内曾次郎」の項目には次のような記述が見られる。

とちないそうじろう 栃内曾次郎

1866—1932

明治—大正時代の軍人。

慶応2年6月8日生まれ。陸奥盛岡藩士栃内理平の次男。

札幌農学校(現北大)予科から海軍兵学校にはいる。明治24年海軍大学校卒業。イギリス大使館付武官、海

軍省軍務局長、海軍次官をつとめ、大正9年海軍大将、連合艦隊司令長官となる。貴族院議員。昭和7年7月12日死去。67歳。

野村氏は、『国史大辞典』(吉川弘文館 平成元年(一九八九年)九月)、及び『日本近現代人名辞典』(臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣編 吉川弘文館 平成十三年(二〇〇一)一月)において、「栃内曾次郎」について項目執筆を担当している。いづれも『日本人名大辞典』より詳細な記述となっている。

『国史大辞典』には、次のような記述がなされている。

とちないそうじろう 栃内曾次郎

一八六六一一九三二

明治から昭和時代前期にかけての海軍軍人。陸奥国南部藩士栃内理平の次男として慶応二年(一八六六)六月八日出生。札幌農学校予科を経て海軍兵学校に進み、明治十九年(一八八六)十二月卒業。巡洋艦「金剛」、旅順口水雷敷設隊の各分隊長などで日清戦争に、砲艦「武蔵」、巡洋艦「須磨」の各艦長などで日露戦争に参加する。戦後、大使館付武官として三年半在英し、装甲巡洋艦「吾妻」艦長を経て明治四十二年十二月、少将に進む。海軍省軍務局長・練習艦隊司令官・大湊要港部司令官・横須賀工廠長を歴任し大正三年(一九一四)五月、中将。第一次世界大戦では艦隊の各司令官や海軍技術本部長を務めたあと、後期から終結にかけ

ては海軍次官であった。大正九年八月、大将に進み連合艦隊司令長官となる。佐世保鎮守府司令長官・軍事参議官を経て大正十三年二月、予備役に入る。昭和七年(一九三二)三月、貴族院議員に勅選されたが、同年七月八日盛岡市で講演中に倒れ、同月十二日同地で死去、六十七歳。「参考文献」海軍有終会編『近世帝国海軍史要』

また、『日本近現代人名辞典』には、次のような記述がなされている。

とちないそうじろう 栃内曾次郎 一八六六一一九三二

明治から昭和時代前期にかけての海軍軍人。陸奥国南部藩士栃内理平の次男として慶応二年(一八六六)六月八日出生。札幌農学校予科を経て海軍兵学校に進み、明治十九年(一八八六)十二月卒業。巡洋艦「金剛」、旅順口水雷敷設隊の各分隊長などで日清戦争に、砲艦「武蔵」、巡洋艦「須磨」の各艦長などで日露戦争に参加する。戦後、大使館付武官として三年半在英し、装甲巡洋艦「吾妻」艦長を経て明治四十二年十二月、少将に進む。海軍省軍務局長・練習艦隊司令官、大湊要港部司令官、横須賀工廠長を歴任し大正三年(一九一四)五月、中将。第一次世界大戦では艦隊の各司令官や海軍技術本部長を務めたあと、後期から終結にかけては海軍次官であった。大正九年八月、大将に進み連合艦隊司令長官となる。佐世保鎮守府司令長官・

軍事参議官を経て大正十三年二月、予備役に入る。昭和七年（一九三二）三月、貴族院議員に勅選されたが、同年七月八日に盛岡市で講演中に倒れ、同月十二日同地で死去、六十七歳。

野村氏の記述はいずれも正確であり、過不足なく整理されている。しかし、紙幅の関係もあり割愛された部分も少なくなく、曾次郎の生涯について知る上では十分なものとはいえない。

二 栃内曾次郎・年譜

曾次郎を知る上で、『日本人名大辞典』、及び野村氏の記述の他に次の資料を参照し、年譜の作成を試みる次第である。

- 鶴崎鷺城『薩の海軍・長の陸軍』政教社 明治四十四年（一九一一）一月（鳥谷部春汀『明治人物論集』明治文学全集 92 筑摩書房 昭和四十五年（一九七〇）五月 一〇一―

一七七頁）

- 八瀬不泥『郷關を出でし岩手の人々』吉野山荘 昭和四年（一九二九）五月

- 財団法人海軍有終会編『近世帝国海軍史要』昭和十三年（一九三八）（『近世帝国海軍史要（増補）』明治百年史叢書 原書房 昭和四十九年（一九七四））

- 前沢隆重『盛岡藩家老栃内与兵衛とその統家系譜伝』アポロ社 昭和四十六年（一九七一）四月

- 遠山崇『海雷水雷戦術の第一人者 栃内曾次郎』（岩手日報社『岩手の先人100人』岩手日報社 昭和六十二年（一九八七）十二月 一三六―一三八頁）

- 椎野八束『連合艦隊司令長官』（戦記シリーズ第六十一号・別冊歴史読本三十五号 新人物往来社 平成十五年（二〇〇三）二月）

元号	西暦	歳	事項
慶応2	一八六六	0	6月8日 陸奥国南部藩士・栃内吉之の次男として岩手県上田村（現・岩手県盛岡市玉山区上田）に生まれる。 兄は元吉。嘉永四年（一八五二）六月八日生まれ。西南の役に参加し、熊本で准陸軍少尉心得となり、屯田兵事務局に勤務。その後永山屯田兵本部長に随行し各国を視察し、屯田兵村の建設に尽くした。 姉は四人。つなは上田重行、きよは原敬の友人であり警察署長などを務めた八角彪一

30	29	26	24	21	19	16	14	明治12	
一八九七	一八九六	一八九三	一八九一	一八八九	一八八七	一八八三	一八八一	一八七九	
31	30	27	25	23	21	17	15	13	
11月、二女・富士子誕生。(後に奈良帝室博物館長の内藤三郎と結婚) 軍務局に転じ、イギリスで建造中だった一等巡洋艦「浅間」を受領のため回航委員とし	11月、長女・京子誕生。(後に子爵山内豊健兄豊陽と結婚)	12月1日 長男・吉彦誕生。 日清戦争後は水雷術練習所教官となる。 日清戦争では旅順口水雷敷設隊分隊に加わり、イギリスから購入した「扶桑」(二七一七ト) 水雷長として従軍した。	夏 海軍大学校(丙号学生) 卒業。 大尉となり、イギリスに注文していた新鋭の鉄骨板艦の巡洋艦「金剛」(二二四八ト)に 乗り込み、水雷長として、朝鮮をめぐる清国と日本との関係が険悪化するのに伴い、分隊 長として兵員の指揮、特に水雷訓練に努める。	9月26日 筑波艦に分隊士として乗船。	9月24日 少尉に任官。	12月10日 海軍兵学校(13期生)を少尉候補生として卒業。	海軍兵学校に入学。	海軍を志願する者のために海軍予備科が設置される攻玉社に入学。	北海道の屯田頭になっていた兄・元吉に伴われ札幌に移り、札幌農学校予備科に進む。 「將軍(稿者注:曾次郎)の母堂は賢夫人と云はるゝ丈けあつて却々立派に子女を育て た。」

				31	一八九九		33	てイギリスに出張。 5月 「浅間」水雷長として回航中も訓練を重ねながら、無事回航を果たす。 6月 対露戦に備え常備艦隊副官となる。
				33	一九〇〇		34	1月26日 海軍省副官兼海相秘書官として山本権兵衛 ⁷ に仕える。 9月 中佐に昇進。
				35	一九〇二		36	12月、三女・三女子誕生。(後に海軍中将の安場保雄と結婚) イギリスで建造された新鋭巡洋艦「浪速」(二六五〇ト) 副長。 イギリス製で「浪速」同型の「出雲」副長。
				36	一九〇三		37	9月 日露戦争直前、呉鎮守府工廠で建造された三等巡洋艦「宮古」(一七七二ト) 艦長。
				37	一九〇四		38	日露戦争開戦とともに横須賀鎮守府工廠建造の砲艦「武蔵」(一四八〇ト) 艦長、「八幡丸」艦長として従軍する。
			38	一九〇五		39	39	1月21日 海軍大佐に昇進。横須賀鎮守府造船部工廠製で国産初の快速艦である三等巡洋艦「須磨」艦長(第三艦隊第六戦隊旗艦) (〓12月12日)。バルチック艦隊と接触を保ち対馬水道に導き、日本海海戦の勝利の因をつくった。 12月12日、在英大使館付武官 (〓明治42年5月3日) イギリスに三年半勤務。世界一と称されたイギリス海軍事情を研究。
			39	一九〇六		40	40	4月1日 功四級金鷄勲章
			41	一九〇八		42	42	12月1日 海戦法会議専門委員
			42	一九〇九		43	43	8月3日、帰国 10月1日、一等巡洋艦「吾妻」艦長。(〓12月1日) 12月1日、海軍少将に進む。海軍省軍務局長となる。(〓明治45年4月20日) 12月 『洋人日本探険年表』(水交社記事第六卷第四號附録 謄写版 洋人日本探険書籍目録巻末) 発行。

	43	一九一〇	44	6月1日、呉鎮守府、竹敷、馬公要港部、第三隊特命檢閲使に東郷平八郎とともに任ぜられる。
	45	一九一二	46	4月20日、練習艦隊司令官を務める。(〜大正2年4月30日)「出雲」に座乗、士官候補生を乗せ艦務訓練に努める。
大正2		一九一三	47	5月24日 大湊要港部司令官。(〜12月1日) 12月1日、海軍中将に昇進。横須賀工廠長。(〜大正3年8月18日) 日露戦争の体験と日本の造船技術の発展で、大鑑巨砲主義に基づく一万トないし二万ト級の建艦計画を監理する。
3		一九一四	48	5月、海軍中将。 8月18日、第二艦隊司令官。第一次世界大戦では、日英同盟の関係からドイツ帝国の租借地青島と膠州湾を封鎖。
4		一九一五		第一艦隊司令官、第四戦隊司令官、第三戦隊司令官を歴任。
5		一九一六	49	12月13日、海軍技術本部長。(〜大正6年9月1日)
6		一九一七	51	1月、周波数変更器、周波変更装置といった高周波電気通信を發明。 9月1日、加藤友三郎外相の下で海軍次官となる。八八艦隊基本計画を構想。 「近く海軍次官に榮転すべく内定した柄内中将の麻布永坂町の邸宅を訪れる、折節中将は海軍省に出勤した後でしげ子夫人が代つて応接された、幾度か水を通つたと思はれる浴衣に地味なメリンスの昼夜帯と云つた▲質素な服装 は先づ床しく見えた、夫人はさすがに嬉しさうに語る、それは真実なのでせうか、未だ宅では少しもそんな話ありません、尤も主人は先年青島戦に出かけましてそれから引継ぎを南洋の方へ行つて居りましたが間もなく海軍省の技術本部の方へ勤めることになつたのでしたが二三日前のことでした。家族一同が晚餐の席で『俺もモウ今の職に就てから満二年になるが、何処かへ転任しなけりやなるまいが、此の次は▲何処へ行く かなあ』と申しましたので夫に關した雑談で食卓が賑ひましたがこんな早く来ようとは思ひませんでした。」
10月1日、船舶管理局評議員。				

1月12日 交通事故で右目を失う。

「海軍次官栃内中将は十二日夜十時頃築地瓢家より赤坂靈南坂二三車宿佐藤権之丞方の車夫上原千松の車に乗り靈南坂の官邸への帰途麹町霞ヶ関貴族院脇を電車通りに出でんとする曲角に差かかるや虎の門の方より一台の自動車疾走し来つて衝突し車上的中将を膝掛ぐるみ跳出され重傷を負ひ血塗れとなつて打ち倒れたるを車夫千松が抱き起し

▲直に辻車 を命じて南佐久間町二の岩島外科病院に連れ込みたり一方自動車は其の儘日比谷公園方面に逸走したるが日比谷署にて取調の結果該自動車は赤坂溜池日本自動車会社の貸自動車一三三三号にて同会社の職工小石川小日向町三九吉田八十吉(二三)が練習の爲め山口平一及齋藤某二名を乗せ運転し居りしものと判明し日比谷署に引致され目下取調を受けつゝあり尚車夫千松も両肘其他に打撲傷を負ひ治療中なり

▲中将の傷は 右眉に八仙米突の裂傷を受けたる外顔面に五箇所左下腿部に一箇所都合七箇所の裂傷及擦過傷にて右肩の裂傷を五針他三箇所も縫合手術を行ひたるが経過良好にして意識も明確なれば発熱等より余病の併発なき限りは約二週間にして全治の見込なるも右眉の裂傷は意外の重く視力に減退を来したれば其経過によりては或は失明の虞あらんかと海軍省にては

▲軍医を特派 し診断するなど頗る憂慮し面会を謝絶して治療中なり中将夫人しげ子も目下病氣にて順天堂赤坂分院に入院加療中なるより令息吉彦(二四)氏を初め長女京(二一)二女富士(二十)三女さめ(十七)の令嬢等は一同病院に詰切り看護しつゝあり十三日朝來報に接し親戚なる東北帝国大学農科大学長佐藤昌介氏を初め井上元帥、島村海軍大将、加藤海将、山本権兵衛伯、大島陸将等岩島病院に見舞ひたり

▲鶴彦翁の狼狽 尚大倉喜七郎氏が自動車会社の社長たる関係より喜八郎男は此の失態を聞きて大に狼狽し直に会社へ駈付け社員を集めて大叱言を浴せたりと。」

5月18日 国勢調査評議会副会長。

6月1日 軍需次官。

9	11	13	昭和4	7
一九二〇	一九二二	一九二四	一九二九	一九三二
54	56	58	63	66
<p>8月16日、海軍大将。第一艦隊司令長官（〜大正11年7月27日）兼連合艦隊指令長官（〜10月31日）。</p> <p>5月1日、連合艦隊司令長官再就任。（〜10月31日）</p> <p>6月1日 佐世保鎮守府司令長官。（〜大正12年6月1日）</p> <p>軍事参議官。</p> <p>予備役に編入。</p> <p>2月 『増修洋人日本探検年表』（岩波書店）発行。</p> <p>3月15日、貴族院議員に勅選される。</p> <p>「海軍の先達であり、先に海軍出身の実吉安純子を失った後を補充する意味から海軍方面から推薦したものであり、盛岡出身政友会とは原敬以来特殊の關係があつて新代議士八角三郎中将とは親戚になつてゐる先般の選挙にも岩手県まで行つて八角君のために応援した程である。」¹¹</p> <p>私立岩手中学校名誉校長に就任する。</p> <p>7月8日 教職員、生徒に告辞中、壇上で脳溢血で倒れる。</p> <p>「海軍大将貴族院議員柄内曾次郎氏は私立岩手中学校の名誉校長を受諾し八日午前十一時四十分頃全生徒に対し就任の挨拶を終り訓示に移つて、それを終る頃に突然卒倒したので大騒ぎとなり岩手病院に入院せしめ佐藤院長等手当を加へたが午後五時昏睡状態に陥り危篤となつた、しげ子夫人と甥の八角海軍中将が八日午後十時半上野発で急行し北大教授嗣子吉彦（四〇）も札幌を立ち九日夕刻盛岡着の¹²はず」</p> <p>7月12日 盛岡で死去した。67歳。</p> <p>「海軍大将貴族院議員柄内曾次郎氏は去る八日私立岩手中学校の名誉校長として全生徒にあいさつ中脳溢血を起し卒倒市内岩手病院に入院家族近親に見護られ昏睡状態を続けてゐたが十二日午前一時四十分遂に逝去した」¹³</p>				

三 枋内曾次郎の人となり

1 兄・枋内元吉

曾次郎にとつて、兄・枋内元吉は親以上の存在であった。元吉は曾次郎より十五歳年長であり、父・吉之は曾次郎の幼いころに亡くなっている。兄・元吉が枋内家の家督を引き継ぎ、盛岡、東京、札幌と居を移すが、曾次郎もそれについていくことになる。後年、曾次郎の長男・吉彦が北海道帝国大学農学部に進み、農学博士として北海道の地で研究生生活を送るが、そこには元吉の存在が大きいことに想像するに難くはない。以下、元吉の生涯について、左に摘記する。

嘉永四年（一八五二）六月八日 盛岡藩士枋内吉之の嫡子として誕生する。

慶応元年（一八六五）十四歳。元服。戊辰戦争後第四十一世利恭公白石藩知事任命に従い、一家をあげて、盛岡より任地白石藩白石城地へ赴任。父吉之を白石に於いて亡くし、一家の責任を背負い、藩主利恭公の盛岡藩知事復帰するに及びまた盛岡に帰る。明治維新のあわただしい日の中に少年の日を送った。

明治三年（一八七〇）十九歳。藩校作人館入学。その後、上京する。後に首相となる原敬とは藩校作人館において同室となり、上京後も親交があった。原敬が郵便報知新聞社員として渡邊洪基に従って東北・北海道を旅行した際に、明治十四年（一八八一）八月一〜九日まで札幌に滞在し、

八月一日に投宿後開拓使に赴き開拓使御用掛の職にあり義兄にあたる佐藤昌介を訪ねる。「旅寓を京華楼に定め長谷部書記官を訪ふ、任らず、又馬島釀君を訪ふ、晩食の饗あり。佐藤昌介君を訪ふ、任らず。去りて枋内元吉君を訪ふ。佐藤君も亦至り相伴ふて蒼海楼に小酌す。遂に枋内君の邸に宿す」とある。原は、宿を取り消し元吉の家に泊まるほどの仲であったことがわかる。

明治四年（一八七一）二十歳。開拓使に採用され、等外一等として北海道に渡る。札幌本道開削工事の監督として、「年上の荒くれ男達を督励して」、函館から大沼公園、室蘭から鷺別までの道路工事を完成させる。

明治十年（一八七七）二十六歳。札幌警察署事務職員となる。折から西南の役が勃発。以前から面識のある堀基准大佐¹⁵が屯田兵を率いて出征するに当たり、頻りに従軍を請うたが許されず、ただ黙認されて乗船し、ついに陸軍少尉心得に採用され小隊長として従軍。凱旋後、山鼻兵村付となる。

明治十一年（一八七八）二十七歳。江別に洋式屯田が置かれると、その出張所長に任命され、教師エドウィン・ダンの指導¹⁶を受ける。北海道帝国大学総長佐藤昌介の妹直子と結婚している。

明治十三年（一八八一）三十歳。樺戸集治館の脱獄囚が出張所を襲い、かねて不和だった屯田兵と警察は、犯人の捕縛

をめぐって対立激突、負傷者を出す。元吉はこの間にあつて事態処理に尽力する。

明治十六年（一八八三）三十二歳。五月、陸軍大尉に任官。

明治二十年（一八八七）三十六歳。陸軍少将永山武四郎¹⁸のロシア・アメリカ及び清への派遣に随行し、ロシアのドン・コサツク兵¹⁹の制度を研究して帰国する。これによつて村落体としての兵村は大いに改良される。

明治二十五年（一八九二）四十一歳。陸軍屯田兵少佐を拝命。

明治二十八年（一八九五）四十四歳。日進戦争に従軍。東京にて待機中終戦を迎える。

明治三十二年（一八九九）四十八歳。旭川連隊区司令官となる。

明治三十七年（一九〇四）五十三歳。二月、召集されて日露戦争に従軍。

明治三十八年（一九〇五）五十四歳。凱旋、陸軍歩兵中佐に進み退役。

その後実業界に転じ、北海道において石炭業・製糸業・牧畜業などを営み、競馬会社などにも関係する。

昭和十八年（一九四三）九十三歳。十一月八日、藤沢市鶴沼において没する。

2 札幌農学校予科から海軍兵学校へ

曾次郎は、札幌農学校予科を卒業後に海軍兵学校に入ったという異色の経歴を持つ。

海軍兵学校に進むいきさつについて、前澤隆重氏は日本の勃興期に成長した時代的背景に言及し、次のように述べている。

一方では、兄元吉の屯田兵少尉としての日常の活躍している姿をみて、兄が陸軍なら自分は海軍でと、海軍に入る決心をかため、²⁰

また、遠山崇氏は次のように述べている。
長兄の労苦を見かね学費一切を削除される海軍志願の念に燃え、²¹

前澤氏は屯田兵少尉としての兄・元吉の姿が影響を与え、遠山氏は兄・元吉の労苦を考へての決断であるとしている。いずれにせよ、兄・元吉の影響をかなりの部分で受けていることは推測できるところである。

3 海軍軍人としての曾次郎

(1) 鶴崎鷺城『薩の海軍・長の陸軍』

最終的には海軍大將までのぼりつめる曾次郎であるが、海軍軍人としてどのような功績を持ち、どのような評価を得たのであろうか。鶴崎鷺城の『薩の海軍・長の陸軍』（政教社 明治四十四年（一九一三）一月）の記述を確認していく。

鶴崎の筆致について、木村毅氏は次のように述べている。

・ 一種の辛辣味を有し、まま骨をえぐり、肝をひしぐような筆鋒を弄する。²²

・ 彼(稿者注：鵜崎)は身みずから政界の表裏に出入して実際知識をもっていることを誇りとし、他の新聞記事や、伝聞に基づいて評論をものしている人を「卓上評論家」とあざけつて、ひそかに高しとする風があった。²³

鵜崎の書く文章は事実を基にして、切れ味鋭いものであると木村氏は評価している。この『薩の海軍・長の陸軍』は『朝野の大閥』(東亜堂 明治四十四年(一九一〇)五月)と並ぶ鵜崎の好著である。木村氏は『薩の海軍・長の陸軍』について次のように評価している。

軍閥の横暴がまだ目立たず、国民は日露戦争勝利の栄光を思うて、まだ軍閥を信頼、尊敬している時、早くも病毒がその全組織にまわっているのを洞観して、憚りなく筆誅を加えたのも実にこの書である。²⁴

言い換えれば、「軍閥が日本を亡国にみちびくのを予見した書」²⁵である。もともと明治四十三年(一九一〇)十月から明治四十四年(一九一〇)十月まで『日本及日本人』²⁶に連載されたものである。当時、曾次郎は海軍の軍務局長の職にあった。

(2) 鵜崎鷺城の曾次郎評

『薩の海軍・長の陸軍』の中で鵜崎鷺城の曾次郎への評価はきわめて高いものがあつた。

薩閥の出にあらざるも隠然海軍部内に勢力を有し、又権兵衛と何等親族関係なくして極めて権兵衛に好く、居然本省中枢部の働役者たる者、一は艦政部長中将松本和、一は軍務局長少将柊内曾次郎とす。

鵜崎の書名が示すとおり、明治時代以降、一般に「薩の海軍、長の陸軍」というように海軍においては山本権兵衛や東郷平八郎に代表される薩摩閥が、陸軍においては山県有朋や桂太郎に代表される長州閥が勢力を握っていた。海軍の幹部のほとんどが薩摩藩出身であり、山本権兵衛との親族関係もない中で、頭角を表した人物として静岡藩出身の松本和²⁸と南部藩出身の曾次郎が並び称される。

柊内も財部一派の人なり。果して軍務局長の貫目あるや否やは疑問なるも、系統既に斯くの如しとせば、其今日ある深く怪むを用ゐず。彼は海軍大学教授故荒川某の女婿にして常に俊秀の中に数へられる。戦歴としては赫々伝ふべき程のものなく、日露戦争の時僅二千噸以内の小艦長たるに過ぎざりしが、通報、偵察、掩護の功亦没すべからざるなり。

ここでいう財部とは、当時の海軍次官・財部彪²⁹のことである。鵜崎は曾次郎を「海軍大学教授故荒川某の女婿」であるとしているが、曾次郎の妻・しげ子は「栃木県人阿部久次郎次女」である。当時、日本の造艦能力は技術的に未熟であり、二千ト級までがやつとであつたが、曾次郎は小型艦をよく御した。三等巡洋

艦「宮古」(一七七二ト)艦長としての活躍を鵜崎は次のように記している。

当時我海軍は敵を旅順に封鎖して完全なる海上権を獲得したるも、更に一步を進めて大連灣付近海面の掃海を行ひて一層安全を保持せざるべからず。是に於て宮古は他の二艦と共に掃海艦隊掩護の任に当り、或時は陸地に接近して威嚇砲撃を加へ、或時は随所に敵の沈没せる機械水雷の危険を冒し、或ひは敵状を偵察し或ひは艇隊を收容する等連日に亘りて能く任務を遂行したり。適々我海軍に取つて不幸なる椿事を見るに至れり。日は三十七年五月十四日、時は四時三十分夕陽漸く西に落ちて渤海の波を彩るの時、其日の作業を終へて將に掃海艇隊を收容せんとす。忽ち轟然たる爆声宮古の艦尾に起ると思ふ間もなく、怒れる潮は幾十丈の天に直上し水煙四辺を籠めて艦影を認むべからず。是れ宮古が敵の機械水雷に触れたるにて艦は纔に二十分余にして沈没したるも、二十余名の死傷者は僚艦の救ふ処となりぬ。枋内は此名譽ある宮古艦長なりしなり。後ち彼は須磨艦長に轉じ片岡の麾下に属して日本海海戦に參加せり。

彼は海軍内部有数の学者にして今日に至るまで海軍に關する著書少からず。且実務の才もあり、目先も見えざるにあらず。大佐太田三次郎をして立論せしめ大佐佐藤鉄太郎を先鋒に立て、縦論横議せしめ、枋内をして之を纏めし

むれば其事必ず成らんとは海軍部内に於ける批評なり。乃ち枋内の円満にして建設の才あるを知るべし。要するに彼は縦合閱歷の足らざるも軍務局長として必ずしも不適任にあらず。其権兵衛に親愛せらるゝは松本の如く夫妻俱に私邸に日參して握筆術を實行するが爲めにあらずして、真に海軍の爲めに必要の人物なればなり。

曾次郎は學問に明るく、『明治三十三年清國事變 海軍戰史』抄卷一—五(海軍大臣官房)などの著書が見られる。「実務の才」もあり、将来を見通す力もあり、「円満にして建設の才」もあるとして曾次郎を鵜崎は高く評価するのである。

4 曾次郎とイギリス

曾次郎には二度の渡英体験がある。一度目は、明治三十年(一八九七)、曾次郎が水雷術練習所から軍務局に轉じ、イギリスで建造中だった一等巡洋艦「浅間」を受領のため回航委員としての出張である。二度目は、明治三十八年(一九〇五)十二月十二日から明治四十二年(一九〇九)五月三日までの在英大使館付武官としての約三年半の勤務である。当時の日本の艦船で大型のもの大部分はイギリス製であった。日本の造艦能力は技術的にはイギリスからかなり遅れをとり、二千ト級までが限界であった。渡英の中で、曾次郎は、当時、世界一と称されるイギリス海軍事情を研究している。

また、曾次郎は、この間にイギリス流の生活にも傾倒している。

帰国後、私服はもちろん、背広はロンドンに直接注文し、下着もイギリス製で、リンネルのハンカチにはナンバーがふつてあったほどである。当時、「海軍一のジェントルマン」の賞賛と「イギリスかぶれ」の批判を同時に受けている。

5 人柄

『朝日新聞』によれば、幼少期の曾次郎はかなり元気な子どもであつたようである。

少年時代には非常に腕白で何時も餓鬼大将となり喧嘩を吹っ掛けるので友達は「糞々」と綽だ名にして居た△將軍の名を曾次郎と云ふのを南部訛曾々と云ふ。夫を更に言ひ替へて、くそくとやつたのである、併し学校の成績は大分良く始終クラスの首位を占めてゐた³⁰

「腕白」、「餓鬼大将」、「喧嘩を吹っ掛ける」とあるから、かなり活発な子どもであつたことがうかがえる。さらに、成績も優秀であるというから、目立つ存在であつたことであらう。

八瀬不泥氏は『郷關を出でし岩手の人々』の「海軍の巻」の中で曾次郎の人柄を同郷の先輩であり海軍大将であつた山屋他人のそれと対照する形で、次のように記述している。

栃内（稿者注：曾次郎）はいづれかといへば豪放磊落、よく飲みよく談ずるといふ方であるが、（中略）栃内の性格のあくまで軍人らしい（後略）³²

昭和七年（一九三二）三月、曾次郎は貴族院議員に勅撰されるが、八瀬は政界に曾次郎が進出することを予言する。

栃内大将は曾つては海軍大将として令腕を揮ひ、海軍部内の一名物であつた、かつては英国大使館附武官もやつたが、海軍技術本部長、海軍工廠長などの技術方面に功が多い、想像するに彼は純軍人といふよりも政治家肌を多分にもつてる男で、かれも恐らくこのまゝに晩年を楽隠居の身として晩酌の盃ばかりなめて終ると思はぬが、恐らく政界進出の機会を覗つて居るのであるまいか。数年前虎の門に於てかれの乗用車が電車に刎ね飛ばされ、あたら一眼を失明させたのも気の毒であつた。男振りには落ちたが有名な山地独眼龍將軍と同じくかれの一眼かへつてよく世界を透視し得るであらうかも知れぬ。栃内は海軍部内に聞えた酒豪で、飲めば又談論風発の気概⁽⁷⁾があり、一種の豪傑である、³³

曾次郎は相当な酒豪であつた。無類の愛酒家として知られる首相で先輩であつた斎藤実とは、斎藤の自宅を訪ね、夜半まで酒を酌み交わすことが再三あり、次のような二日酔いに関する逸話が残っている。

その当時の子爵（稿者注：斎藤実）は、海軍切つての酒豪であられた。概して酒をよく飲んだ昔の海軍士官の中で、特に酒豪といはれたのだから、その酒量は蓋し驚く可きものがあつたことだらう。殊に次官といふ最も忙しい激職に居られ、酒盃に親まれる機会が多かつたので、さすが豪酒家の子

爵も、時に宿酔に悩まされることがあつたといふ。私の父（稿者注：曾次郎）も、相当な酒豪であつたから、若い時は恐らく宿酔の経験があり、その対症療法「迎へ酒」の秘訣を心得てゐたものとみえて、之を子爵にレコメンドしたさうである。³⁴

また、長男・吉彦は曾次郎との「親子酒」の思い出を次のように記している。

落語家の先代小さんがよく親子酒といふ話をした。親子で仲よく酒をのんでいるうちに、二人ともしたゝか酔払つてしまつて、親父が、こんな顔の三つも四つもある化けものにはこの身代は譲れない、と管をまくと、倅も負けてあず、こんなぐるくまはるやうな家を誰がもらつてやるものかといふ。私は、父の晩年、ある宴席の余興で、この先代小さんの親子酒を、親子そろつてにやにやしながらきいたことがある。それ以来父は私と二人で楽しむ晩酌を親子酒と称し、白鹿の樽がはいつたから親子酒をやりに出て来いなどといふ葉書をはるく、東京から札幌によこしたりした。親子酒は対酌が親子なるが故に酒は雅趣を生ずる。³⁵

「白鹿の樽」を親子二人で飲もうというのだから、親子そろつての酒豪ぶりがうかがえるとこころである。

『朝日新聞』は妻・しげ子に曾次郎の家庭での様子を取材し、次のように記している。

主人は食事の時を除く外は減多に私共と口を聞くやうな

ことはありません、全くの武骨者でして他人様やうに碁将棋謡曲玉突等の方には全然手出し致しません、暇さへあると書斎に入り込んで読書をして居ります、若い時代から非常の子煩悩でして今では末子の三女子（十八）が主人の秘蔵つ子となつて居ります大変な▲出無精です けれど、三女だけには、一月に一度位は銀座辺まで引つ張り出されて色んな買物を背負はされて来ます、長男の吉彦（二五）は札幌農大の三年又長女京子（二二）は他家に嫁いで居りますので宅におるのは次女富士子、三女三女子の二人丈けです。³⁶無口ではあるが、子煩悩であり、読書家でもあることがうかがえる。

6 『洋人日本探険年表』

前項で鶴崎が曾次郎について「海軍内部有数の学者」であると評していることを引用したが、曾次郎は『洋人日本探険年表』という労作を著書に持つ。曾次郎の在英時、欧米人が日本について著した探検誌、航海記、見聞録、風土志、研究資料等を鋭意収集し、整理したものが、この『洋人日本探険年表』である。

明治四十二年（一九〇九）十二月、水交社記事第六卷第四號附録として、謄写版洋人日本探険書籍目録 卷末に附し発行する。その「緒言」に発行に至つた経緯が記されている。

此ノ年表ハ明治四十二年中英文ノ書籍ニ依リ余カ船乗トシテ面白ク感シタル所ヲ拾ヒテ綴リタルモノナリ而シテ之

ニ日本書ヨリ得タル少許ノ記事ヲ対照ノ為メ加ヘタルモ素日本書乏シキ国ニ在リタル間ノ漫筆ナレハ日本書側ノ記事ハ比較的雑駁杜撰ナルヲ免レサルヘシ

年表中ノ記事西曆側ノ二面ハ総テ洋書ニ依リ日本年号側ノ二面ハ日本書ニ依ル年月日乃至普通数字ヲ単ニ洋数字ノミニテ頭シタル所多キハ書写ノ便ニ從ヘルノミ冊尾ノ書目ノ多数ハ余ノ眼ニ触レタリト云ハンヨリハ余ノ手ニ触レタリト云フニ止マルモノ多シ

余ノ此年表篇綴中ニ文明協会ノ欧米人ノ日本看出テタルハ余ノ歡迎スル所ナリ

此ノ機会ニ於テ余ハ此ノ年表篇綴中余ニ与ヘラレタル内外諸氏ノ好意ヲ謝ス

明治三十八年(一九〇五)十二月十二日、曾次郎は在英大使館付武官となる。イギリスで曾次郎は、世界一と称されるイギリス海軍事情を研究する。イギリスの生活にも慣れた明治四十一年(一九〇八)から日本に帰国する明治四十二年(一九〇九)までの二年の間に休暇を利用して、英文の書籍に目を通してゐる。曾次郎の語学力は相当なもので、洋書を読む際には英和辞典は一切用いず、読みこなした。

この年表は、年次ごとに英文の記事と日本の書籍の記述を対照する形となつてゐるが、イギリスの地においては、くまなく日本の書籍に目を通すことは難しく、日本の記事は「小許」であり、英文の記事に比し「雑駁杜撰」となつてしまつたと反省してゐる。

曾次郎は、昭和七年(一九二七)二月、『洋人日本探検年表』を増訂し、十数年の歳月を経て岩波書店から『増修洋人日本探検年表』を發行してゐる。その自序に改訂の経緯が記されてゐる。

其ノ後読ムニ連レ聞クニ連レ年表ノ紙面雜然タル加筆ニ満チ一大整理を要することとなり同時に近年南蛮吉利支丹本の出頭数多く夫等を読んで簡單にどの時代どう云ふ事に関連するかの前後の対照には貧弱なる余の年表が座右に欠くべからざる役目を為せるより思立ちたる儘整理に取掛り単行本として同好家及専門家の叱正を請ふこととなせり曾次郎は、日本の書籍にある記事や南蛮資料やキリシタン文献資料を参照し、加筆・修正に取り組んだのである。

同時期にヨーロッパに留学してゐた国語学者・新村出³⁷とも交流があり、『増修洋人日本探検年表』の巻末には新村が「跋文」を寄せてゐる。

二十年前著者の英京に駐在せられしや、公暇を利用して、欧米人が日本に関して著はし、探検誌航海記はた見聞録風土志及び其の他諸種の研究資料を鋭意蒐集せられき。是れ固より単に愛書好奇の情を充たさんが為めにあらず、蓋し其の集書の目的たる、彼等洋人が我が海帝国に向ひて行ひし所の探検航行と通商貿易との経路如何、国土觀察と教学伝播との如何を詳かにするにありしならん。当時予亦倫敦に遊学し、屢々古書を大英博物館の図書室に探りしことありしが、而も時々著者の書齋に出入して其の旧儲新得

にかゝれる這般近代の史籍地誌の閲覽を縦まゝにするを得、裨益する所少からざりき。³⁵

明治四十二年著者と予と春夏相前後して帰朝せしに、幾許もなくして、著者は其在英中行余の業績を要約して一冊となし、名づけて洋人日本探検年表といひ、之を私刊して少数同好の士に頒布せられぬ。即ち今増訂して新刊せらるゝ所の年表の初版本となす。予亦一本の恵与を得て、參考の資に供せしこと頗る多かりき。³⁶

曾次郎のロンドンでの研究の様子、新村との交流の様子がうかがえる。

『洋人日本探検年表』は極めてわずかな部数が発行されるに終わり、関係者に頒布されるのみであった。新村も曾次郎の『洋人日本探検年表』を参照していたというのである。

爾来、著者退閑の後更に東西新古の史書を博搜して日本探検史に関する造詣愈々深遠を加へ、旧作の年表を増益修訂すること歳あり、是に於て記載補註せられし事項は初版本に数倍し、且つ附録と索引とを添へ、内容外形全く一新して公刊將に弘く史学家読史者の座右に備へられんとす。豈に慶すべきにあらずや。

若し夫れ年表中探検航海等の考察に至つては、著者の本領に属する所の海事の智識を待つて闡明せられし所多々存すべきなり。然らば、則ち之に由りて此の著書永く学界に異彩を放つに足り、海將にして愛史家たる著者亦能く其の

面目を發揮したるものと謂ふべし。

予平素自ら史伝の要項を体裁に編するを好み、私かに以て簡捷にして検索の便甚だ大なりと為せり。茲に予の年表癖を以てして此の探検年表の刊行に接す、何ぞ歎び迎へざるを得んや。況んや日本の海表諸邦に對する史実に就きては予亦感興極めて深きものあるに於てをや。

今此の新修の年表、幸に岩波氏の好意に依りて出版せらるゝに及び、予欣喜の情措く能はざるものあり、乃ち敢て憚らず蕪雜の辞を列ねて跋文となす。

新村は、『増修洋人日本探検年表』を高く評価するのである。『増修洋人日本探検年表』は全百七十九頁、次のように構成されている。

- 一、年表(千五百一年前記)
- 二、年表(千五百一年以降)
- 三、冊尾付録
 - 一 海軍歴史の小笠原記事
 - 二 水戸の快風丸到石狩川口記事
 - 三 異船打払令の消長
 - 四 露人の千島諸島來侵
 - 五 露領及北米漂流者一覽
 - 六 ペリリ艦隊訪日遠航行動表
 - 七 濠州の發見
 - 八 洋人日本探検書籍目錄

四、索引

『増修洋人日本探検年表』の記事はすべて横書きで記載されている。「一、年表(千五百一年前記)」は極めて少なく、わずかに三頁を割くのみである。一方、「二、年表(千五百一年以降)」が大部分を占め、九十二頁を割いている。

『増修洋人日本探検年表』について、書評の中で今宮新は次のような評価が見られる。⁴⁰

本書は此を使用する場合に他のものに比して少しく不便であり且つその引用書に於ても充分でないとするも、兎に角歴史専門家でない著者の努力に依てかゝる特殊な年表が作られた事は実に喜ぶべき事である。本書がかゝる方面の唯一の年表として当然史学家読史者の座右に備へらるべきものであらう。⁴¹

使用に不便であり、引用が不十分な部分も散見されるものの、欧米との外交の史実を知る上で座右に置くべき書として評価している。

新村が曾次郎を「海将にして愛史家」と評するように、曾次郎の多様な方面での才能を感じずにはいられないところである。

注

1 「教材「浅春随筆」考」(『釧路論集』第三十九号 北海道教育大学釧路校 平成十九年(二〇〇七)十一月 一一—一三頁)

2 みやべきんご 宮部金吾 一八六〇—一九五一 万延一—

昭和二十六年

明治から昭和時代にかけての植物学者。万延一年(一八六〇)閏三月七日幕臣宮部孫八郎式臣の五男として江戸下谷御徒町に生まれる。東京英語学校を経て札幌農学校官費生となり、明治十四年(一八八一)札幌農学校を卒業。新渡戸稲造と内村鑑三は札幌農学校の同期。その年から開拓御用掛として東京大学で植物学を学び、かつ北海道、千島の植物の研究に従事した。明治十六(一八八三)年札幌農学校助教授。明治十九年(一八八六)アメリカのハーバード大学に留学して海藻学と菌学を学んだ。明治二十二年(一八八九)帰国し教授となり、植物学・菌学・植物病理学を担当。同校が東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学になった後も引き続き教授。明治三十二年(一八九九)理学博士。昭和二年(一九二七)停年退官し名誉教授。昭和五年(一九三〇)帝国学士院会員。昭和二十一年(一九四六)文化勲章受章。昭和二十四年(一九四九)札幌名誉市民。北海道・千島・樺太の植物相を調査研究し、植物病害の調査研究に多くの業績を挙げた。昭和七年(一九三二)千島列島中の得撫海峡(択捉島・得撫島間)に植物分布の顕著な境界を発見、のちに宮部金吾を記念して宮部線と命名された。その後植物病理学に転じ植物病理学担当の教授となった。熱心なクリスチャン。昭和二十六年(一九五一)三月十六日札幌で死没。九十歳。墓所は、札幌円山墓地にある。

宮部金吾博士記念出版行会編『宮部金吾』(岩波書店

昭和二十八年(一九五三)六月)

平塚直秀「植物病理学者宮部金吾先生」(『採集と飼育』第
四十二巻第十号 日本科学協会 昭和五十五年(一九八
〇)十月)

3 注1 三頁

4 のむらみのる 野村実 一九二二—二〇〇一 大正十一—
平成十三

大正十一年(一九二二)四月十六日、滋賀県彦根市生。

日本の海軍軍人、軍事史研究者。専門は日本海軍史。旧制彦
根中学校を経て海軍兵学校第七十一期入校。昭和十七年(一九
四二)十一月十四日卒業時成績順位次席。空母「瑞鶴」、戦艦
「武蔵」乗組、軍令部第一部付(作戦記録係)で太平洋戦争を経
験、海軍兵学校教官で終戦を迎える。終戦後は復員庁で極東国
際軍事裁判海軍被告人弁護事務を担当。その後防衛庁防衛研
修所(のち防衛研究所)で、戦史室戦史編纂官として『戦史叢書』
の編纂に従事する(この作業に前後して慶應義塾大学大学院文
学研究科に向向、専門的な歴史研究について清水潤三に師事。
昭和五十八(一九八三)文学博士の学位を取得)。昭和五十四年
(一九七九)防衛研修所第二戦史研究室長。昭和五十八年(一
九八三)防衛大学校教授。その後名古屋工業大学教授、愛知工
業大学客員教授、軍事史学会会長などを務め、平成十三年(二
〇〇一)五月十八日没。著書『日本海海戦の真実』(講談社現代

新書 平成十一年(一九九九)七月)では、秋山真之の作戦上で
の貢献に異論を唱えている。

5 野村実「枅内曾次郎」(臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣編
『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 平成十三年(二〇〇一)一
月)

6 「東人西人」『朝日新聞』大正三年(一九一四)十二月十四日
三頁

7 やまもとごんべえ 山本権兵衛 一八五二—一九三三 嘉
永五—昭和八

明治から昭和時代前期にかけての海軍軍人、政治家。名前は
「ごんのひょうえ」ともいう。薩摩藩士山本五百助の三男。嘉永
五年(一八五二)十月十五日生まれた。十四歳で父を失い、慶応
三年(一八六七)十六歳で藩主島津忠義に従い京都守護に任じ、
禁門の守衛にあたり、ついで鳥羽・伏見の戦、奥州戦争に従軍、
明治二年(一八六九)藩より東京留学を命ぜられ、昌平黌・開成
所に学び、明治三年(一八七〇)海軍兵学寮に転じ、この間、征
韓論に会し西郷隆盛の説諭で学業に専心し、明治七年(一八七
四)卒業、この間台湾出兵に従軍。明治八—九年(一八七五—七
六)筑波に乗り組みアメリカ巡航、明治十—十一年(一八七七—
七八)艦務研究のためドイツ軍艦に乗り組み世界周航、以後扶
桑・乾行・龍驤・乾行・浅間乗組、明治十五—十八年(一八八二
—八五)浅間副長、明治十八年(一八八五)浪速副長、明治十九
年(一八八六)天城艦長を経て明治二十年(一八八七)海軍大臣

伝令使、同年より樺山資紀次官の随員として約一年欧米派遣、高雄・高千穂艦長を経て明治二十四年（一八九一）六月海軍大臣官房主事（のち海軍省主事）として縦横にその才を振るい、西郷従道海相を補佐して海軍の改革、陸軍に対する海軍の地位向上に努め、その手腕は「権兵衛大臣」とまで評せられた。すなわち、明治二十五年（一八九二）には参謀本部（長は参謀総長で、すべて陸軍）の統轄下にあつた海軍の軍令機関を軍令部として独立を策し、陸軍の反対を排して翌明治二十六年（一八九三）実現、また海軍の人事の刷新を行なつた。日清戦争には大本営海軍大臣副官、作戦に関し陸軍の参謀本部次長川上操六に作戦計画上、海軍の重要性を認識させた。戦争間は高陞号事件や英商船テールス号臨検問題、三国干渉への対処、連合艦隊司令長官更迭問題（伊東祐亨が黄海海戦で功をあげたので、更迭してほかに功臣を出そうとする軍令部長の提案、山本反对）など、内外の機務に参画し、海軍軍政の中心として活躍した。明治二十八年（一八九五）少将・軍務局長、軍令部御用掛を兼ね、西郷海相の内訓により、戦後の海軍の充実（組織・建艦・教育機関など）につき調査研究し、実行に移した。この間海軍を実質的に陸軍と対等とした。ついで台湾事務局委員、明治三十一年（一八九八）五月中将、十一月より明治三十九年（一九〇六）一月まで山県有朋、伊藤博文、桂太郎の三代の内閣の海軍大臣を歴任した。明治三十三年（一九〇〇）の北清事変には艦隊を派遣して警戒せしめ、陸戦隊を急派して大沽の会戦に参加せしめ、陸軍の厦門

占領作戦には断固反対した（伊藤博文の尽力もあり、作戦中止）。明治三十四年（一九〇一）六月桂内閣が成立すると、桂太郎首相は重要事項はまず山本海相に協議すべしといい、外交は桂・山本・小村寿太郎外相が協議推進し、明治三十五年（一九〇二）日英同盟実現に協力した。日露開戦前、山県有朋の韓国への派兵計画に反対し、開戦後は内閣の柱石として、特に海軍の作戦全般にわたつては中心となつて画策した。この間、明治三十五年（一九〇二）男爵、明治三十七年（一九〇四）大将、戦後、功一級、明治三十九年（一九〇六）軍事参議官、明治四十年（一九〇七）三―八月イギリス出張、九月伯爵。大正二年（一九一三）の大正政変で第三次桂内閣が倒れたあと、立憲政友会と結んで、二月第一次山本内閣を組織し、現役武官大臣制の改革などで業績をあげた、翌大正三年（一九一四）三月シーメンス事件で内閣は総辞職、現役を退いた。五月予備役編入。しかし以後も「海軍の大御所」・薩派の長老として隠然たる勢力をもち、大正十二年（一九二三）九月、関東大震災の渦中で再度内閣を組織し、普選実現、行財政整理、日ソ国交回復などを公約したが、震災の事後処理に忙殺されるなかで、十二月の虎の門事件で引責辞職した。昭和三年（一九二八）の即位式には大勲位菊花大綬章を授けられた。昭和八年（一九三三）十二月八日没。八十二歳。従一位。十二日海軍葬。青山墓地に葬られた。近代海軍の建設者として「海軍の父」と評せられた。財部彪は女婿。国立国会図書館憲政資料室に『山本権兵衛関係文書』が所蔵される。日清戦争

では実質上海軍機務を切り回して権兵衛大臣の異名を得た。日露戦争の難局も突破した。

故伯爵山本海軍大将伝記編纂会編『伯爵山本権兵衛伝』

(原書房 昭和四十三年(一九六八))

海軍大臣官房編『山本権兵衛と海軍』(原書房 昭和四十

一年(一九六六))

8 「子煩悩で読書家／海軍次官に内定した柄内中将／食卓の無駄話が真物になった／子供に誘はれて銀座(買物に)『朝日新聞』大正六年(一九一七)八月三十日 五頁 尚、引用の囲み文字は四倍角となっている。以下同様。

9 「柄内次官 失明の虞——瓢家からの帰途／自動車に轢かれて重傷」(『朝日新聞』大正三年(一九一四)一月十四日 五頁)

10 れんごうかんたい 連合艦隊

戦略単位となる艦隊二個以上で編成し、必要によりさらに艦船部隊を編入、付属させたもの。

主として外洋作戦を担当する二個以上の艦隊でもって編成し必要に応じ艦船・部隊を編入される日本海軍の中核部隊。最初に編成されたのは、明治二十七年(一八九四)七月十九日日清戦争に際してで、常備艦隊と西海艦隊とから成り、黄海海戦などで清国艦隊を連破した。司令長官は海軍中将伊東祐亨。ついで、明治三十六年(一九〇三)十二月二十八日日露戦争に際して編成され、第一艦隊と第二艦隊とから成り、のちに第三艦隊・第四艦隊も編入され、司令長官は海軍中将(明治三十七年(一

九〇四)六月大将)東郷平八郎。日本海海戦ではバルチック艦隊を撃滅した。第一次世界大戦に際しては連合艦隊の編成はなく、その後は演習その他の目的のため、年度の所要期間だけ編成される状況が続いたが、満洲事変のあと昭和八年(一九三三)五月二十日以降、常時、編成されるようになった。連合艦隊司令長官は天皇に直隷し、軍政に関しては海軍大臣の指揮を受け、作戦計画に関しては軍令部総長(昭和八年(一九三三)までは海軍軍令部長)の指示を受けた。日清戦争のときは常備艦隊司令長官が連合艦隊司令長官を兼務し、そのあとは第一艦隊司令長官が連合艦隊司令長官を兼務したが、連合艦隊の常設後は連合艦隊司令長官が第一艦隊司令長官を兼務する形式となり、昭和十六年(一九四一)八月十一日になって、はじめて連合艦隊司令長官と第一艦隊司令長官とが分離された。昭和期の連合艦隊はアメリカ海軍を想定敵とする決戦艦隊であり、太平洋戦争開戦直前までの間、ながく連合艦隊司令長官が主力部隊の常備艦隊または第一艦隊を直接指揮するようにされたのは、日本海軍部内にあつた「指揮官先頭」という根強い伝統によつていた。日本海軍は外洋作戦に適する艦艇と航空機の大部分を連合艦隊に編入する方針をとり、太平洋戦争開戦時の連合艦隊は、第一艦隊(戦艦基幹部隊)・第二艦隊(重巡基幹部隊)・第三艦隊(比島部隊)・第四艦隊(内南洋部隊)・第五艦隊(北方部隊)・第六艦隊(潜水艦基幹部隊)・第一航空艦隊(空母基幹部隊)・第十一航空艦隊(基地航空部隊)・南遣艦隊(マレー部隊)の九個艦隊から

成り、戦時中はさらに方面艦隊なども編成されて、艦隊数は十五を越えたこともある。開戦時の勢力、戦艦十、空母十など二五四隻、戦時建造三八三隻、敗戦時の作戦可能艦艇四五隻。司令部(旗艦)も開戦時の戦艦長門から末期には陸上に移された。昭和二十年(一九四五)四月二十五日、全海軍部隊の作戦指揮を行う海軍総隊司令部が設置され、連合艦隊司令長官が海軍総司令長官を兼務し、ついで五月一日、海軍総司令長官が連合艦隊司令長官を兼務する形態となった。したがって連合艦隊は日本海軍そのものを体現していたといつて過言ではない。太平洋戦争開始にあたっては、山本五十六連合艦隊司令長官が主張した真珠湾奇襲攻撃が功を奏して緒戦の勝利を収めたが、昭和十七年(一九四二)のミッドウェー海戦で連合艦隊は敗北を喫し、以後、山本、古賀峰一の二代の連合艦隊司令長官が戦死するなど、敗勢の恐回はならなかった。昭和十九年(一九四四)のマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦以後、海軍は主力艦隊をほとんど喪失し、連合艦隊司令部は艦上から横浜市日吉台に移り、敗戦を迎えた。敗戦により十月十日、連合艦隊は海軍総隊司令部とともに解散された。

野村実「連合艦隊」(『国史大辞典』)

前田哲男『日本大百科全書』

栗屋憲太郎「連合艦隊」(『世界大百科事典』)

11 「枅内曾次郎」『朝日新聞』(夕刊)昭和七年(一九三二)五月十六日 一頁)

12 「枅内大将危篤／校長の挨拶中に昏倒し」(『朝日新聞』昭和七年(一九三二)七月九日 一一頁)

13 「枅内海軍大将／今晝遂に盛岡にて」(『朝日新聞』大正七年(一九一八)七月十二日 一一頁)

14 原敬「海内周遊日記 第八報」(田中朝吉編『原敬全集』上 原敬全集刊行会 昭和四年(一九二九) 一二七頁)

明治三十四年(一八八二)十一月九日付『郵便報知新聞』掲載分タイトルには「海内周遊日記」とのみある(覆刻版『郵便報知新聞』二十八、五三頁)。

15 ほりもとい 堀基 一八四四—一九二二 弘化—明治四十五年

幕末・明治期の鹿児島藩出身の官僚、野に下つて実業家となる。弘化元年(一八四四)六月十五日薩摩国鹿児島郡元村(鹿児島市)に、鹿児島藩士堀権四郎の子として生まれる。元治元年(一八六四)勝海舟の海軍操練所に入り、慶応三年(一八六七)対露関係を憂えて箱館に至る。明治元年(一八六八)正月鳥羽・伏見の戦に参加、四月箱館裁判所が置かれるとその監察・参事席を命ぜられ、五月には民政方勸農掛をもつて樺太在勤となった。翌明治二年(一八六九)七月開拓使が設置されるとその御用掛となりついで大主典となった。以後も樺太の事務をとることが多く、開拓権判官・少判官などを経て、明治十年(一八七七)准陸軍大佐兼開拓大書記官となる。屯田兵を率いて西南戦争に従軍、明治十一年(一八七八)暮に職を退いた。明治十五年(一八八二)

には函館の実業家とともに北海道運輸会社を起こして社長となり、その関連で共同運輸会社・日本郵船会社の理事となった。明治十九年（一八八六）北海道庁が置かれると再び官に復して理事官となったが、明治二十二年（一八八九）非職となって同年末北海道炭鉄道会社を起して社長となった。明治二十五年（一八九二）、専断の事跡が多いとして解任され、明治二十七年（一八九四）から貴族院議員となった。この間明治二十四年（一八九三）に私費を投じて北鳴学校をおこし、北海道における中学校教育の創始者となっている。明治四十五年（一九一〇）四月八日鎌倉で没。六十九歳。

北海道総務部行政資料室編『北海道開拓功労者関係資料集録』（下巻 北海道 昭和四十七年（一九七二）三月）

16 ダン Edwin Dun 一八四八—一九三三

アメリカの畜産技術者、外交官、開拓指導者。嘉永一年（一八四八）七月十九日米国オハイオ州ダン農場の二男に生まれ、マイアミ大学中退後、家業に従事中明治六年（一八七三）開拓使が購入した牛と羊の輸送をケブロンから依頼され来日した。函館、札幌などで畜産指導にあたる。二十五歳の若さで東京・第三官園で家畜の飼養技術を指導、明治八年（一八七五）函館七重官園に赴任、そこで津軽藩士の娘増子ツルと結婚、一段と日本への愛着を深めた。明治九年（一八七六）札幌に移り牧羊場および真駒内まこまに牧牛場を創設、明治十一年（一八七八）新冠にいかつかに馬の牧場を開いた。ダンの人情に厚く責任感の強い人柄は、農業畜産技術の指導を受けた多

くの青年に敬愛され、北海道畜産の父といわれたが、明治十五年（一八八二）開拓使廃止により北海道を去った。明治二十六年（一八九三）駐日米国公使となり、日清戦争の講和に尽力。のち新潟の石油開発事業その他に活躍したが、昭和六年（一九三二）東京で死去した。八十二歳妻ツルの死後中平ヤマと再婚、その二男の妻は音楽家のダン道子である。

北海道新聞社編『北海道歴史人物事典』（北海道新聞社 平成五年（一九九三）七月）

17 さとうしやうすけ 佐藤昌介 一八五六—一九三九 安政三—昭和十四

明治から昭和前期にかけての農業経済学者。安政三年（一八五六）十一 明治から昭和前期にかけての農業経済学者。北海道帝国大学初代総長。安政三年（一八五六）十一月十四日南部藩士昌蔵の長男として陸奥国（岩手県）花巻に生まれる。幼名謙太郎。父昌蔵はのちに代議士として活躍したキリスト者であった。明治四年（一八七一）上京して大学南校にはいり、のち東京英語学校に学んだ。明治九年（一八七六）札幌農学校一期生として入学、教頭クラークから学問的、宗教的な薫陶を受けメソジスト教会に所属。明治十三年（一八八〇）同校を卒業した。開拓使御用掛に奉職、明治十六年（一八八三）渡米してジョンズ・ホプキンス大学で農政学を研究、明治十九年（一八八六）帰国して母校の教授に任ぜられ、以後約五十年間札幌農学校および東北帝大農科大学・北海道帝大の教授、校長、学長、総長として教育に専念した。昭和五年（一九三

○七十五歳で後進に途を譲るまで十三年の長きにわたって北大の初代総長をつとめ大学の発展につくした。札幌農学校の廃校論や財政的危機と闘いながら同校の発展に尽力、「北大育ての親」といわれる。退官後は北海道農会長をつとめた。また北海道庁に種々の献策を行った。これより先、昭和三年(一九二八)には男爵を受けた。昌介の生涯は、彼が北海道大学の父といわれたように、札幌農学校および北大の歴史そのものであったといえることができる。学者としての昌介は、とかく教育者としての昌介の背後に押しやられがちであるが、農業経済学者として「大農論を主張し、明治農学史上にその名をとどめている。著書に『世界農業史』などがある。昭和十四年(一九三九)六月五日札幌の自宅で没。八十四歳。墓は札幌市豊平墓地にある。

北海道総務部行政資料室編『北海道開拓功労者関係資料集録』(上巻 北海道 昭和四十六年(一九七二)三月)

佐藤昌彦『佐藤昌介とその時代』(東京玄文社 昭和二十三年(一九四八)十月)

中島九郎『佐藤昌介』(川崎書店新社 昭和三十一年(一九五六)九月)

蝦名賢造『札幌農学校』(図書出版社 昭和五十五年(一九八〇)八月)

18 ながやまたけしろう 永山武四郎 一八三七—一九〇四 天保八—明治三十七

明治時代の陸軍軍人、第二代北海道庁長官。天保八年(一八

三七)四月二十四日薩摩国に生まれる。戊辰戦争に従軍後、明治四年(一八七二)陸軍大尉となる。明治五年(一八七二)開拓使八等出仕となり、開拓次官黒田清隆の下で北海道開拓と屯田兵制度の創設に尽力、明治十年(一八七七)の西南戦争には屯田兵第一大隊を率いて参戦した。明治十八年(一八八五)屯田兵本部長となり、明治二十年(一八八七)アメリカ、ロシア、清国の移民・農業制度などを視察して『周遊日記』を著した。明治二十一年(一八八八)には第二代道庁長官を兼任して上川開発に意を注ぎ、のち屯田兵司令官。屯田兵廃止後の初代第七師団長となり、陸軍中将。貴族院議員を歴任した。明治三十七年(一九〇四)五月二十七日没。旭川市の旧永山兵村は彼の名にちなんでいる。

桑原真人「永山武四郎」(『日本大百科全書』)

「永山武四郎」(『日本人名大辞典』)

19 ロサク Cossak || Kazak(ロシア)

南ロシア、ウクライナ、シベリアなどで活躍した騎馬に巧みな戦士集団。南ロシア、ウクライナ、シベリアなどで活躍した騎馬に巧みな戦士集団。ロシア語のカザーク Kazak は(放浪者)(冒険者)を意味するトルコ語に由来し、以前は中央アジアのカザフ人もカザークとよばれた。ドミトリー・ドンスコイの時代からモスクワ大公に仕える者も現れてきた。その後十五世紀から十六世紀にかけて、モスクワ公国やポーランド王国の支配の強化を嫌って、辺境のステップ地帯に逃亡する農民の集団をさすようになり、さらに十八世紀から二

十世紀初頭においては、軍役奉仕を義務とする特別の社会層をさすようになつた。中世末ロシアの南・南東国境の警備にトルコ系カザーク、ついでロシア人が配置されたが（町のカザーク）、十五世紀後半から役人や地主の圧制を逃れて国境を越えた逃亡農民などもカザークと称し、この（自由カザーク）がドン、テレク、ヤイク（ウラル）などの川岸に集まり、それぞれ十六世紀のうちに、全員の集会（クルーク）とアタマンの選挙制をもつ独特の民主的・軍事的な組織をつくつた。同じころウクライナにもコサックが生まれ、ドニエプル流のザポロージェに本営（セーチ）がおかれた。コサックははじめ農耕を行わず、狩り、漁業、養蜂と、平原や河川での略奪をこととし、軽快な小舟を編成して時には黒海、カスピ海の対岸まで遠征した。一五六九年ウクライナを併せたポーランド政府はコサックの数的規制と不正規軍としての利用をはかつたが、ポーランド人地主とカトリック教会の進出に対するウクライナ人農民の反発のなかでコサックも再三反乱をおこし、一六五四年フメリニツキーがコサックの特権とウクライナの自治を条件にツァーリに臣従した。

ロシア政府のコサック政策も利用と規制の二面をもつた。政府はドンなどのコサック集団に穀物や武器・弾薬を供して黒海北岸のトルコ勢力やクリム・ハーン国その他の遊牧民と対抗させ、またシベリア征服にも彼ら（Tエルマーク、Vアトラソフ、Sデジニョフら）を尖兵として利用しながら（シベリア）、彼らの独自の動きには警戒を怠らざ、これを規制しようとした。コサックはその略奪的遠征でしばしばトルコ政府を刺激し、それに何よりも、自由を求める逃亡民やラスコ

ーリニキ（ロシア正教会の分離派）を受け入れる危険な存在であった。ポロトニコフ、ラージン、ブラービン、Brahm、プガチョフの乱においても、コサックの「自由」が辺境の民衆をひきつけ、彼らの独立不羈の精神はのちにレフ・トルストイなどによつてもたええられた。

しかしコサック社会にも早くにゴレイチバ（貧民層）が発生しており、これに対するスタルシーナ（長老層）のロシア政府への接近と政府の支配力の辺境への浸透が、とくに十八世紀になつてコサックの自治を形骸化させ、アタマンも政府が任命するようになった。ウクライナでもマゼパの謀反後コサックによる自治は大幅に制限され、ザポロージェのセーチも一七七五年に撤去され、一部のコサックはトルコ領のドナウ下流岸に移つた。しかしロシア政府は他方では、一七五〇年以降、辺境防備と植民のためカフカス、中央アジア、シベリア・極東に、解体したコサック集団の移駐も含めて次々に新たなコサック軍団を配置した。古くからのドン軍団を含め、二十世紀初めには十一の軍団が存在し（一九一六年に兵員数約二十八万五千。その三分の二はドンとクバンの軍団。同年のコサックの総人口約四百四十三万）、彼らは日露戦争や第一次世界大戦でもロシア騎兵軍の中核として活躍した。コサック軍の最高司令官には一八二七年から皇太子がつき、軍団の所在地は民政も含めて陸軍省が管轄し、コサックはロシア帝国の特別な軍事身分とされた。男子コサックは十八歳から二十年（一九〇九年からは十八年）の軍役に服したが、火器以外の武器・装備と軍馬を自給し、土地割当てで普通の農民より優遇され、教育程度もやや高かつた。おそらくこうしたことから、一般民衆に

対する差別意識と皇室に対する強い忠誠心が生まれ、コサック騎兵は一八五六年から大都市や工場中心地にも駐屯し、ロシア革命まで民衆運動の鎮圧に当たった。革命でコサック社会にも動揺が生まれ、コサック身分も否定されたが、内戦期には多くのコサックが赤軍と戦って戦後に約三万人が亡命し、シベリアでもセミヨノフが活躍した。大祖国戦争には、一九三六年に再建されたコサック騎兵軍団が参加し、投降兵などからドイツ側にもコサック部隊がつけられた。ゴゴリの『タラス・ブリーバ』、L・トルストイの『コサック』、シヨロホフの『静かなドン』がコサックの生活をえがいている。

なお、一九八〇年代後半のペレストロイカからソ連邦崩壊、各共和国独立にいたる過程で、コサック軍団の再興がみられる。とくに民族紛争の起っている地域のうち、カフカス地方のチェチェン独立運動や、モルドバ(旧モルダビア)におけるロシア系住民を中心とするドニエストル共和国の運動などでは、ドン・コサックやロシア各地のコサックの参加が伝えられているが、コサックがロシア・ナシヨナリズムと結びついて行動することが少なくない点が注目される。

鳥山成人「コサック」『世界大百科事典』

外川継男「コサック」『日本大百科全書』

20 前沢隆重『盛岡藩家老枅内与兵衛とその統家系譜伝』アポロン社

昭和四十六年(一九七二)四月 一〇八頁

21 遠山崇『海雷水雷戦術の第一人者 枅内曾次郎』(岩手日報社)

『岩手の先人100人』岩手日報社 昭和六十二年(一九八七)十二

月 一三六頁)

22 木村毅『鷲城と健堂』(鳥谷部春汀『明治人物論集』明治文学

全集92 筑摩書房 昭和四十五年(一九七〇)五月 三八八頁)

23 注22 三八八頁

24 注22 三八八頁

25 注22 三八八頁

26 にほんおよびにほんじん 日本及日本人

明治末期—現代の総合雑誌。明治四十年(一九〇七)一月一日

創刊。主筆は三宅雪嶺。前身は明治二十一(一八八八)年四月三日

創刊の国粹主義団体政教社(東京)発行の機関誌『日本人』。『日

本人』は第一次から第三次まで、また、代替誌『亜細亜』があり、後

継の『日本及日本人』は前身すべての号数を継続したため、創刊号

は第四五〇号として出発した。だが、誌名の『日本人』を『日本及日

本人』と改題したのは、明治中期の代表的な政論新聞『日本』を精

神において合併したからである。『日本』(前身は明治二十一年(一

八八八)四月九日創刊の『東京電報』は陸実(羯南)が社長兼主筆

となつて明治二十二年(一八八九)二月十一日に創刊した『国民主

義』の新聞で、「国粹主義を主張した『日本人』とは主義・人脈にお

いて同盟関係にあつた。この『日本』が羯南の病氣と経営難のため、

明治三十九年(一九〇六)六月に経営が伊藤欽亮に譲渡されたが、

伊藤は旧来の記者(三宅雪嶺・国分青・古島一雄・河東碧梧桐・長

谷川如是閑ら)の期待を裏切つて、編集や記事にも手を加えるなど

十八年来の『日本』の伝統と特色を損う態度をとつたため、雪嶺ら

のほとんどが明治三十九年(一九〇六)十二月四日に連袂退社し

て『日本』を離れ、「その精神の存続」として『日本人』によったため、第三次『日本人』の第四五〇号を『日本及日本人』（命名者は雪嶺）と改題し創刊号としたのである。発行兼編輯人は八太徳三郎、印刷人は千葉亀雄。当初、発行所と編輯所は別で、編輯所は東京市芝区桜田鍛冶町十番地政教社、発行所は京橋区五郎兵衛町金尾文淵堂であり、のち、発行所も政教社となった。毎月、原則として一日・十五日に、二冊を刊行した。創刊当初の固定欄の内、「題言」と巻頭論文（社説的な主論説）は雪嶺が無署名で毎号執筆し、執筆陣はほか、長谷川如是閑、福本日南、丸山幹治、久津見藤村など。「雲間寸観」（内外の時事評論）執筆は主に古島一雄、「評林」（漢詩による時評）担当は国分青、「東瀛詩観」（漢詩）選者は岡崎春石、「俳句」選者は内藤鳴雪、「日本俳句」（一般募集の俳句）選者は高浜虚子、「和歌」選者は三井甲之などで、その他「簾視壁聴」（政界・社会寸評）、「玉石同架」（新刊雑誌・書評）などがあり、堂々たる総合雑誌であった。体裁は、B5版、当初は一〇〇頁前後で定価十五銭、二年目に入り、一五〇頁前後になり定価二十銭、大正四年（一九一五）二十二銭、七年二十五銭、九年四十銭と物価騰貴に伴い定価も倍加した。表紙は年ごとに干支に因んだ絵で飾られた。元旦号・特集号・臨時増刊号が大きな特色で、五〇〇頁、一〇〇〇頁の大冊も珍しくなく、そのつど好評を博した。その主なものに、「吉田松陰号」（第四九五号、明治四十一年（一九〇八）十月十八日）、「憲法滿二十年記念」号（第五〇三号、明治四十二年（一九〇九）二月十一日）、「南洲号」（第五四二号、明治四十三年

（一九一〇）九月二十四日）、「現代諸家の俠的人物観」（第五四九号、明治四十四年（一九一一）一月一日）、「大正三年發展号」（第六三九号、大正三年（一九一四）九月二十日）、「郷土光華（お国自慢）号」（第六六五号、大正四年（一九一五）十月五日）、「高杉東行先生」特集（第六七七号、大正五年（一九一六）四月一日）、「現代名家文章大観」特集（第六八九号、大正五年（一九一六）九月二十日）、「明治大正半百年記念号」（第七一四号、大正六年（一九一七）九月二十日）、「義民号」（第七六六号、大正八年（一九一九）九月二十日）などがあり、貴重な資料となっている。明治四十五年（一九一二）一月一日発行の第五七三号から表紙に「三宅雪嶺主筆」と明記され、雪嶺の『日本及日本人』として世人に迎えられ、言論界に重きをなした。このように、同誌は雪嶺らの明治中期以来の「国粹主義」を継続させ、創刊号の第四五〇号の「題言」で『日本及日本人』の名に於て日本が如何に世界の人文に寄与すべきか、世界が如何に日本のためにすべきかを説明するに従事する、憶ふに決して野卑の業ならざらん」と主張しているように、国粹主義といっても右翼的国体論のような狭いものではなく、明治政府の上からの欧化政策に対抗した開明的な国粹主義であった。雪嶺の「国粹主義」と世界主義が共存し、これを反映して、寄稿者は当時の言論界・学界などの著名人すべてといつてよいほど多彩であった。そして、在野性を堅持し、憲政擁護運動・普選運動を支持し、全体的には大正デモクラシー期の新たな社会問題・労働問題などに対しても積極的な論調を展開した。如是閑や丸山は大正デモクラシー論客の中心

ともなった。大正期に入り杉浦重剛らが参加し、如是閑や中里介山の小説があつたり、外国文学を精力的に紹介した。大正十二年(一九二二)に政教社の経営が悪化し、雪嶺は政教社の解散と経営の刷新を主張したが、関東大震災による打撃も加わって内紛が激化し、関東大震災後の再建をめぐり社内が対立し、大正十二年(一九二三)九月一日発行の第八六九号を最後にして雪嶺は政教社を離れ、以後、十月十五日創刊の『我観』を主宰した。政教社の解散に反対した小谷保太郎・雑賀博愛らの存続派は、大正十三年(一九二四)一月一日に『月刊日本及日本人』を創刊したが、以後は著しく保守的傾向を強めた。昭和期には五百木良三らの右翼の手に移り、ファシズム体制を支える論調を展開した。侵略戦争の開始と並行して超国家主義的色彩を濃くして、戦争協力の雑誌となった。昭和二十年(一九四五)二月発行の第四四〇号まで継続した。第二次世界大戦後、昭和四十一年(一九六六)一月、日本及日本人社より復刊され、現在に至っているが、往年の色彩はない。国会図書館・東大明治新聞雑誌文庫(欠号あり)に所蔵。

日本近代史料研究会編『雑誌「日本人」「日本及日本人」目次総覧』(早川図書 昭和五十二年(一九七七)七月)

松本三之介編『政教社文学集』、『明治文学全集』37 筑摩書房 昭和五十五年(一九八〇)五月)

松本三之介「日本及日本人」、『文学』第二十四卷第四号

岩波書店 昭和三十一年(一九五六)四月 五一三―五

一九頁)

27 うざきろじょう 鶴崎鷺城 一八七三―一九三四 明治六

―昭和九

明治・大正時代のジャーナリスト。明治六年(一八七三)十一月一日、旧播磨国姫路藩士鶴崎久平の四男として生まれる。本名は熊吉。明治二十六年(一八九三)東京専門学校(現早大)卒業。『東京日日新聞』の従軍・政治記者として活躍。『九州日日新聞』『毎日電報』『大阪毎日新聞』『関門日日新聞』などでも記者として活躍する傍ら、『日本人』『日本及日本人』『中央公論』などに軍閥・財閥批判や政界人物評を寄稿、当時の政界人物評論界では見方の鋭い点で優れていた。明治二十九年(一九九六)以来犬養毅に師事する。明治四十三年立憲国民党にくわり、犬養毅をささえる。昭和九年(一九三四)十月二十八日没。六十二歳。著書は『朝野の五大閥』『犬養毅伝』などすこぶる多い。

木村毅「鷺城と健堂」(鳥谷部春汀『明治人物論集』明治文学全集92 筑摩書房 昭和四十五年(一九七〇)五月 三八―八頁)

28 まつもとかず 松本和 一八六〇―一九四〇 安政七―昭和十五

明治―大正時代の海軍軍人。中将。安政七年(一八六〇)二月二十三日(三月十五日)静岡県生まれ。八重山、富士などの艦長をつとめ、明治四十一年(一九〇八)艦政本部長となる。明治四十二年(一九〇九)海軍中将。大正三年(一九一四)巡洋戦艦金剛発注の際、イギリスのビッカーズ会社から代理店三井物産を

通じて四十万円余を収賄し(シーメンス事件)、軍法会議で懲役三年、追徴金四十万九千八百円の判決をうけ、呉鎮守府長官
当時に収監された。昭和十五年(一九四〇)一月二十日死去。
八十一歳。海軍大学校卒。名は「やわら」ともよむ。

(「松本和『日本人名大辞典』)

29 たからべたけし 財部彪 一八六七—一九四九 慶応三—昭和二十四

明治から昭和時代前期にかけての海軍軍人。慶応三年(一八六七)四月七日日向国都城に財部実秋の次男として生まれる。妻は山本権兵衛の次女いね。明治二十二年(一八八九)海軍兵学校卒業、海軍兵学校十五期。同期には岡田啓介・広瀬武夫がいる。明治二十六年(一八九三)海軍大学校卒業、日清戦争には高雄分隊長として従軍した。その後英国留学、海軍軍令部付を経て日露戦争では大本営参謀となった。明治四十二年(一九〇九)には少将海軍次官に就任、大正三年(一九一四)五月シーメンス事件により待命となるまで、山本権兵衛の直系として辣腕をふるった。以後第三艦隊司令長官、旅順要港部司令官、舞鶴・佐世保・横須賀各鎮守府長官を歴任、この間大正八年(一九一九)には大将に昇任した。大正十二年(一九二三)第二次山本権兵衛内閣の海軍大臣に就任。清浦内閣では村上格一に交代したものの、加藤高明内閣で再任、第一次若槻礼次郎、浜口雄幸内閣と留任した。昭和五年(一九三〇)のロンドン軍縮会議には若槻礼次郎らとともに全権として出席、加藤寛治海軍軍令部長ら

わゆる艦隊派の反対を押し切つて調印、条約派の指導者と目された。この調印に対し国内では統帥権干犯の声が広がり、昭和六年(一九三一)四月浜口内閣倒壊とともに財部も軍事参議官に転じ、同七年に予備役となった。爾後昭和二十四年(一九四九)一月十三日、八十三歳で没するまで自適の生活を送った。なお国立国会図書館憲政資料室には、少尉に任官した明治二十三年(一八九〇)より昭和十八(一九四三)年に至る日記五十四冊を含む『財部彪関係文書』が所蔵されている。また、日記の一部は『財部彪日記——海軍次官時代』、『近代日本史料選書』(一一)として刊行されている。

広瀬順昭「財部彪」(『国史大辞典』)

藤原彰「財部彪」(『日本大百科全書』)

30 「東人西人」朝日新聞 大正三年(一九一四)十二月十四日

三頁

31 やまやたにん 山屋他人 一八六六—一九四〇 慶応三—昭和二十四

明治から昭和時代前期にかけての海軍軍人。慶応二年(一八六六)三月四日盛岡に生まれ、明治十九年(一八八六)十二月海軍兵学校卒業。日清戦争の黄海海戦に西京丸航海長として参加し、戦訓により丁字戦法の原形となる「円戦術」を最初に主唱したといわれ、戦術家として知られる。海軍大学校卒業後、日露戦争にも巡洋艦秋津洲・笠置の両艦長として参加し、累進しても大正八年(一九一九)十一月大将。第一艦隊・兼連合艦隊・横須賀鎮守府の各司

令長官を歴任して、十二年四月予備役に入る。昭和十五年（一九四〇）九月十日死去。七十五歳。

野村実「山屋他人」『日本近現代人名辞典』

野村実「山屋他人」『日本大百科全書』

32 八瀬不泥『郷關を出でし岩手の人々』吉野山荘 昭和四年（一九二九）五月 二五頁

33 注32 二八頁

34 枅内吉彦「齋藤さんの思ひ出」『新岩手人』第十一卷第四号

新岩手人社 昭和十六年（一九四一）四月（枅内吉彦『山談花

語』青山出版社 昭和十八年（一九四三）五月 二六二頁）

35 枅内吉彦「炉辺漫談 親子スキー」『春夏秋冬』柏葉書院 昭和二十二年（一九四七）六月 一四〇頁

36 「子煩惱で読書家／海軍次官に内定した枅内中将／食卓の無駄話が真物になった／子供に誘はれて銀座へ買物に」『朝日新聞』

大正六年（一九一七）八月三十日 五頁

37 しんむらいずる 新村出 一八七六一一九六七 明治九—昭和四十二

明治から昭和にかけての言語学者、国語学者、文化史家。明治

九年（一八七六）十月四日山口県山口町道場門前町で父関口隆吉

（当時山口県令）・母静子の次男として生まれ、明治二十二年（一

八八九）新村家に養子となった。第一高等学校を経て明治三十二

年（一八九九）東京帝国大学文科博士（後の言語学科）を

卒業、東京高等師範学校教授・東京帝国大学文科助教授（兼

任）などで国語学を講じたのちヨーロッパに留学し、帰国後、明治四十年（一九〇七）京都帝国大学文科助教授に転じ、外遊後明治四十二年（一九〇九）同教授となつて、退官まで言語学講座をすること二十八年におよんだ。明治四十三年（一九一〇）文学博士。

明治四十四年（一九一一）以来久しく同大学附属図書館長を兼ね、昭和十一年（一九三六）同大学を退官、名誉教授の称号を受けた。

昭和三年（一九二八）帝国学士院会員となり、日本言語学会会

長・日本方言学会会長等々としても貢献するところ多かつた。昭和三十一年（一九五六）文化勲章受章。国語審議会、国宝保存会など、種々の委員会の委員や会長などをつとめ、學術の振興に大きな

貢献をした。昭和四十二年（一九六七）八月十七日、九十歳で没。墓は京都市本能寺にある。日本における言語学の創業の功が上田

万年に帰せられるとすれば、新村は、その設計に参与して上田を助けたばかりでなく、新村自身、たゆまぬ構築の努力をつづけていった

ものと評しうる。その業績は、その内容において学問的価値を有するばかりでなく、流麗な筆によつて精彩を放っている。その研究範囲

はひろく、ことに、語学資料の研究に端を発したいわゆる南蛮研究では、独自の地位を占めている。彼は言語学者であるが、その本領

は、むしろ文化史上の問題の考証を得意とする歴史家たるにある。ヨーロッパの言語学を踏まえ、たうえで内外の資料を博搜して、日本

語音韻史や近隣の諸言語との比較研究に成果をあげ、それらは『東方言語史叢考』（大正十四年 一九二五）にまとめられている。

また、日本語の語源の考証や外来語の研究にも力を入れ、『東亜語

源志』(昭和五年 一九三〇)がこの方面の主著であるが、ほかにも語源に関する随筆風の著作が多数ある。また、キリシタンの残した文献を国語史の資料として利用することに端を発して、広く南蛮文化の研究を行い、『南蛮記』『南蛮更紗』『日本吉利支丹研究余録』など、文芸的香りの高い考証的随筆集を著した。西洋の言語理論を移入して日本語学の樹立に努め、特に日本語の歴史的研究において、キリシタン文献・抄物などの資料を紹介するとともに、南蛮研究や語源・語誌の研究に新生面を開くなど顕著な業績を残した。著書は、『新村出全集』全十五巻、同索引一卷全集(昭和四十六―四十八年 一九七二―七三)にまとめられている。国語辞書の編集を通じて社会に致した功績もまた没しえない。各種の国語辞典の編者となったが、『辞苑』(昭和十年 一九三五)の増補版である『広辞苑』(昭和三十年 一九五五)は百科事典を兼ねる便利なものとして広く用いられている。おもな著作はすべて全集に収められ、さらに東京帝国大学における講義の筆録が『新村出国語学概説』(昭和四十九年 一九七四)として刊行された。

新村猛編『美意延年——新村出追悼文集』(新村出遺著刊行会 昭和五十六年(一九八一)七月)

38 柄内曾次郎『増修洋人日本探検年表』(岩波書店 昭和七年

(一九三二) 一七七頁)

39 注 38 一七七―一七八頁)

40 いまみやあらた 今宮新 一九〇〇―一九八二 明治三十

三―昭和五十七

明治三十三年(一九〇〇)五月十六日、土浦市にほど近い茨城県新治郡出島村に生まれる。慶應義塾大学に学び大正十二年(一九二三)三月文学部史学科を卒業、昭和六年(一九三一)から三年間にわたってドイツに留学、昭和八年(一九三三)助教授就任、昭和十三年(一九三八)には教授の職につき、昭和四十四年(一九六九)三月定年により退職、四月名誉教授。この間、慶應義塾文学部理事、塾史編纂所長、中等部長を歴任する。昭和二十六年(一九五一)「班田収受制の研究」で文学博士の学位を取得、日本歴史学協会委員長を務める。昭和五十七年(一九八二)二月二十八日、急性心不全のため死去。八十一歳。

「今宮新先生略歴」(『史学』第四十三巻第一・二号 昭和四十五年(一九七〇)五月 三九一―三九二頁)

41 今宮新「洋人日本探検年表(柄内曾次郎編 岩波書店發行)」(『史学』第八巻第四号 昭和四年(一九二九)十二月 六六五頁)

【資料】栃内曾次郎・家系図



